

三重県熊野古道活用プランの概要

1 策定の趣旨

- 熊野古道伊勢路を効果的に活用した地域経済の振興、観光インフラの整備等、県として取組が必要な課題が存在する。
- 世界遺産登録20周年を契機として、これまでの県の取組を検証しつつ、**観光インフラ整備、魅力の発信等**、熊野古道アクションプログラムの「めざす姿」の実現に向けて、県の取組を明らかにするために策定。

2 現状と課題

(1) 観光インフラ整備

- 案内標識は古道沿線約1,500箇所に設けられているが、内容が不統一で老朽化や多言語に未対応のものが多く存在する
- 伊勢路沿線のトイレは一定区間ごとに確保されているが、老朽化や洋式化されていないなど、快適な使用に課題のあるトイレが存在する
- JR、バス停留所から各峠道へのアクセスに課題がある
- 道路網の整備に伴い自家用車利用による来訪者の増加が想定される
- 古道歩きの後に地域の観光施設などへの誘導がなく、地域経済への効果が低い
- 高付加価値の宿泊施設（インバウンド向けを含む）が少ない

(2) 「魅力」の発信

- 熊野古道伊勢路は、伊勢神宮と熊野三山の二大聖地をつなぎ、世界でも珍しい「道」の世界遺産である
- 熊野カルデラに由来する巨岩、巨石に触れ、人為と自然が見事に調和した森林地帯を実感できる「絶景」の道である
- 世界遺産を構成する奈良県、和歌山県と連携を図りながら、伊勢路の魅力発信を効果的に進める必要がある
- 県立熊野古道センターの常設展示は、開館後のインバウンドの増加等の社会環境の変化をふまえ見直しを図る必要がある

(3) 熊野古道の保全

- 保全団体は10名以下の団体が約6割であり、高齢化が進行し担い手が不足
- 熊野古道サポーターズクラブ会員は約1,900名いるものの、保全活動への参加は5%程度
- 保全活動の財源は主に寄付金で賄われているが活動資金が不足

1 計画期間

令和7年度から11年度までの**5カ年計画**

- 熊野古道アクションプログラムの「めざす姿」（3追記編抜粋）
「歩き旅」を象徴的なイメージとしながら、さまざまな目的で多くの人が伊勢路を訪れ、それが地域の活力になっています。

3 取組の方向性

(1) 観光インフラ整備

- 「熊野古道伊勢路案内等表記ガイドライン」に沿った多言語対応の**案内標識の整備**（新設・更新）にかかる支援
- 新たに設けた補助制度により**トイレの洋式化**などを推進
- 二次交通の利便性向上のためJR特急南紀と連動する**地元バス、タクシー事業者と連携**した調査・実証事業の実施
- 自家用車利用を想定した峠登り口付近の**駐車場の状況調査**を行い、アクセス方法の検討
- 市町及び観光・商工団体などと連携した**地域の観光施設等への誘客促進**
- 高付加価値の宿泊施設（インバウンド向けを含む）**の誘致

〔令和11（2029）年度の目標〕

- ・案内標識・トイレの整備が進むとともに、二次交通にかかる利便性の向上が図られています。
- ・案内機能にかかる方向性を明らかにします。



(2) 「魅力」の発信

- 伊勢路を「**二大聖地を結ぶ絶景の道**」として、魅力発信やプロモーションを推進
- 東紀州地域振興公社、市町及び観光・商工団体などと連携し、**峠ごとの魅力や周遊コース等の情報発信**
- 世界遺産を構成する**奈良県、和歌山県と連携**した効果的なプロモーション、案内機能の強化
- 県立熊野古道センターの**常設展示のリニューアル**による魅力発信、多言語化、DX化による集客交流の強化

〔令和11（2029）年度の目標〕

- ・熊野古道伊勢路の年間来訪者数 令和8年度 44万人
（令和9年度以降の評価指標や目標値についてはあらためて検討）



(3) 熊野古道の保全

県が市町等と連携して持続可能な**保全の仕組み**を検討

- 熊野古道サポーターズクラブ**会員の参画促進
- 企業、団体、外部ボランティアの受入れ**による担い手確保
- ふるさと納税、クラウドファンディング、企業や来訪者による支援など、**新たな財源確保策**の検討
- 次世代継承**のための啓発活動や体験機会の充実

〔令和11（2029）年度の目標〕

- ・熊野古道伊勢路全域で持続可能な保全の仕組みが構築されています。

